



TITLE:

宋齊時代の卹

AUTHOR(S):

越智, 重明

CITATION:

越智, 重明. 宋齊時代の卹. 東洋史研究 1963, 22(1): 39-54

ISSUE DATE:

1963-07-30

URL:

<https://doi.org/10.14989/152631>

RIGHT:

宋齊時代の卹

越 智 重 明

は し が き

南朝の宋齊時代のことを記した史書には、屢々（名詞的用法としての）「卹」という語が出てくる。卹の語には役人が役を負担する代りに納める錢そのものを指す場合と、役人が役を負担する代りに官に納めた錢（の幾分か）を、改めて文武官に廣義の俸祿の一部として給するものを指す場合とある。ところで、宋齊時代におけるこうした卹の盛行を時代の流れと関連づける際、戸籍偽造による役人減少への対策と國庫の良貨吸收策との二面が大きく浮び上ってくる。本稿はそうした觀點から主として齊時代の卹を取りあげる。^①

一 卹の一般的性格

六朝の官人には、原則として俸祿が支給される。（官職によってはその俸祿に職田收入を含むことがある。）ところで、官人にはそうした俸祿のほかには役吏が支給される。

この存在は改めて述べるまでもあるまいが、念のため齊時代のそうした役吏についての若干の史料をあげると、南齊書卷四十巴陵王子倫傳に、

（永明）十年、遷北中郎將・南琅邪彭城刺史二郡太守。鬱林卽位、以南彭城祿力優厚、奪子倫與中書舍人綦母珍之、更以南蘭陵代之。

とある。「祿力」は俸祿と力人という意味である。また、南齊書卷三武帝本紀永明七年正月の條に、

戊辰、詔曰、諸大夫、年秩隆重、祿力殊薄。…可增俸、
コトゴトヲ詳給見役。

とある。

官人に給される役吏は、その性格に應じて白直、左右その他いろいろの名でよばれているが、それらを總括的に僮とか幹とか幹僮とか僮幹とか吏僮とかよぶことがある。第三節に引く南齊書王敬則傳に、

僮卹所上、咸是見直。

とあるが、卹はもともと幹僮たるべきものが服役の代りに差出したものである。卹は元來「めぐむ」という意味であるが、本稿で取りあげるような意味が生じたのは、幹僮としての見役を免ずることを「恩恵」と規定しその代りに錢を出させるといふ考えかたに基くのであろう。こうした幹僮（の役）は雜使（の役）のことであって、唐時代の番役の先驅的性格をもつ。さて、卹が官人に支給されたとき、それは當然廣義の官祿の一部となる。南齊書卷三武帝本紀永明八年十二月の條に、

戊寅、詔、尚書丞郎、職事繁劇。卹俸未優。可量增賜祿。とあるが、そこに見える「卹俸」はそれにあたる。また、

南齊書 卷三十四虞玩之傳に、

上、患民間欺巧。及即位、敕玩之與驍騎將軍傅堅意、檢定簿籍。建元二年、詔朝臣、曰、…玩之上表曰、宋元嘉二十七年、八條取人、^(七)孝建元年書籍、衆巧之所始也。…

自孝建已來、入勳者衆。其中操干戈衛社稷者、三分殆無一焉。勳簿所領而詐、注辭籍、浮遊世要、非官長所拘錄、復爲不少。…尋、物之懷私、無世不有、宋末落紐、此巧尤多。又將位既衆、^{アテテ}舉卹爲祿、實潤甚微。而人領數萬。

如此二條、天下合役之身、已據其太半（三分の二）矣。

とある。「將位既衆」は勳簿に記載された軍勳の程度に應じ吏部尚書から品官としての武將に任ぜられたものが數多くいるということである。「舉卹爲祿、實潤甚微。而人領數萬」は、政府がそうした數多くの武將に對して卹だけを與えることにした。そうした諸武將にとっては卹だけが祿（＝「俸祿」）である。従つてその實際の潤はそれぞれの品官本來の潤に比べて甚だ少ないが、それでも人ごとに卹錢數萬を受けているという意味になろう。^⑧なお、右の上表ごろ米一石が普通百餘錢であつた。ちなみに、梁書卷四十九鍾嶸傳に、梁初（天監七年の改革以前）の鍾嶸の上言をの

せている。そのなかに、

若吏姓寒人、聽極其門品。不當因軍（勳）、遂濫清級。若僞難儉楚、應在綏撫。正宜嚴斷祿力、絕其妨正、直乞虛號而已。

とある。これは虚號將軍（その他の虚號の官）には幹僮なり卹なりを與えるべきでないことを説いたものである。しかしその成果は明らかでない。

卹の原型ともいうべきものは、管見の及ぶ限りでは、晉書卷七十八孔愉傳に、

咸和八年、詔曰、尚書令（陸）玩左僕射（孔）愉、並格居官次、祿不代耕。端右任重。先朝所崇。其給玩親信三十人、愉二十人稟賜。愉上疏固讓。優詔不許。重表曰、臣等不能贊揚大化、糾明刑政。而偷安高位、橫受寵給。無德而祿、殃必及之。不敢橫受殊施、以重罪戾。從之。とあるのが始めである。しかしそれが明確化し、かつ大きい政治問題、社會問題になるのは、次節以下で述べるように宋齊時代、とくに齊時代である。

41
つぎに幹僮なり卹なりを給される官人の範圍であるが、その最低は第九品官に及んだと考えられる。すなわち、南

齊書卷四十六顧憲之傳に、顧憲之の議をのせ、そのなかに、

俗諺云、會稽打鼓送卹、吳興步擔令史。會稽舊稱沃壤。今猶若此。吳興本是瘠土。事在可知。云云。

とある。「會稽打鼓送卹、吳興步擔令史。」は、豊かな會稽郡では幹僮の役を負擔すべきものが現實には卹を送ってその役を免かれ、一方貧しい吳興郡では現實に幹僮の役を負擔したことを物語っている。この記述から（一）當時、現實の幹僮の役に現錢を納めて免かれる場合とその現錢がないために實役に服した場合とあるのが知られる。また、（二）幹僮支給の對象となる官が少なくとも原則的に令史にまでも及んだことが知られる。令史は當時、庶出身者が就くべき勳位である。令史の最高は勳位としての第八品官であり、低い方には勳位としての第九品官に續く六品勳位がある（六品勳位は品官ではないが職掌でもない。一種の獨特のものである）。六品勳位に給吏（＝幹僮）が給された事例は見當らないが勳位たる第九品官に給吏（＝幹僮）の存した事例はある。すなわち、通典卷二十二職官四歷代都事主事令史の項に、

晉宋蘭臺寺正書令史、雖行文書、皆有品秩。朱衣執板。

給書僮。…梁陳與晉宋同。

とある。晉の蘭臺寺の令史は正令史、書令史ともに第九品官である。

ところで、隋書卷二十四食貨志に、東晉時代以後のことを述べ、

都下人、多爲諸王公貴人左右佃客典計衣食客之類。皆無課役。

とある。右の「左右」は幹僮の一種である。當時諸王公貴人の下限は第六品官であるが、そうすると右の左右支給の對象となる官は一應第六品官までということになる。これはさきにあげた幹僮（なりその代りとしての邸なり）を支給される官の下限とは自ら異なる。蓋し當時においても唐代の番役の場合と同様、官人の性格などによってそれに給される幹僮の名稱、内容、支給される官の下限などに相違がありそれがさきの相違として現われたのであろう。^⑨

なお、宋書卷八十五王景文傳に、

（前略）上詔答曰、…今既省錄（尚書事）。（尚書）令便居昔之錄任。置省事及幹僮、竝依祿格。云云。

とあるが、幹僮なり邸なりを給される際、そこには當然の

こととして一定の基準があったと考えられる。

以上考察したのは官人を中心としたそれと幹僮（邸）との關係である。官人に給される役人^{エネジ}は幹僮だけであるが、逆に役人としての幹僮が官人に給されるものだけを指すとはいえない。他に官廳に給されるものと、治水などに服するものがある。官廳に給される幹僮の例をあげると、南齊書卷九禮志一に、

永明二年、太子步兵校尉伏曼容、表定禮樂。於是、詔尚書令王儉、制定新禮。立治禮樂學士及職局、置舊學四人新學六人正書令史各一人幹一人。祕書省差能書弟子二人。因集前代、撰治五禮。吉凶賓軍嘉也。

とあり、梁書卷二十一江革傳に、

（徐）韋爲吏部郎。坐杖曹中幹、免官。

とある。こうした幹は幹僮のことである。治水などに服する幹僮の役は第二節と第三節とで取りあげる。邸は以上瞥見した役に出るべき役人が役に出る代りに納めた錢を指すことと、官から官人に給される（幹僮の代りとしての）錢を指すこととあるわけである。（ただし、役人がその自由意志で錢を納めて役に出る代りとなしえたかどうかは必ら

ずしも明らかでない^⑨。）

二 戸籍偽濫の盛行と幹僮

魏晉時代の戸籍制度にあっては、その戸籍は戸の政治的身分によって士籍その他に區別されていた。ところが宋の孝建元年こうした戸籍制度が廢止され、全國民が單一平等の戸籍に附されるようになった。そこでは戸籍制度上、戸の構成員の政治的身分としての士は品官に就くことによつて獲得されるようになった。つまり舊來の士庶の區別は單に社會的身分として残るだけになった。しかしそれにしても舊來の士つまり當時社會的身分が士のものは、通常、上級士人にあつては第六品官以上、下級士人にあつては第七・八・九品の清官に就くべきであり、舊來の庶つまり當時社會的身分が庶のものは通常第七品以下の濁官（二品勳位以下）に就くべきであつた^⑩。

ところで、新戸籍制度になると社會的身分が庶のものが戸籍の注を僞つて士になつたと稱し、以て役を免がれることが多くなつた。第一節で取りあげた虞玩之上表から、本來役人たるべきもの（つまり社會的身分が庶のもの）の

2/3が軍勳によつて役を免かれていること、及びそのうちの約2/3が僞りの軍勳によつて役を免かれていることがわかる。そうすると、本來役人たるべきもので、僞りの軍勳によつて役を免ぜられているのは $\left[\frac{2}{3} \times \frac{2}{3} \right]$ となる。

つまり本來役人たるべきものの約半數は戸籍の注を僞つて品官 \parallel 士となつていたことになる。これは齊初、建元二年のことであるが、齊一代を通じて同様であつたとしてよい。こうした士にあつてもその近親に免役權が與えられていたのはいうまでもない。以上瞥見したような状態では役人が少なくて國政運営にも差支えることになる。かつて士籍が正常な形で存在していた時代では、世襲的に政治的支配者層を構成した品官 \parallel 士の層が役の對象となることは夢想さえできなかったであらう。（當時戸籍偽濫は殆んどなかつた^⑪。）しかし士籍が廢止され戸籍偽濫を行つて品官 \parallel 士になつたと稱するものが數多くなり、國政運営にも差支えるようになると、彼らをも對象とする役が不可避免的に生ずべきであらう。ただし、庶の戸籍偽濫にあつても、むやみに高官品に就いたと僞ることは無理であるから、一般には第七・八・九品中の勳位に就いたと僞つたとすべきであら

う。こうしたことと、第七品官以下が一面で政治的被支配者層におしきげられつつある大勢^④とがからみあって、そこに第七・八・九品に就いたものをも何らかの形でその対象とする新しい役制の生ずべきが豫想されるのである。以下それを取りあげる。

通典 卷三 食貨三 鄉黨の項に、

(沈) 約上言曰、……按、宋元嘉二十七年、始以七條徵發。既立此科、苟有迴避、姦僞互起、歲月滋廣、以至於齊。於是、東堂校籍、置郎令史、以掌之。而簿籍於此大壞矣。凡粗有衣食者、莫不互相因依、競行姦貨、落除卑注、更書新籍。通官榮爵、隨意高下。以新換故、不過用一萬許錢。昨日卑微、今日仕伍。……臣謂、宋齊二代、士庶不分、雜役減闕、職由於此。……臣又以爲、巧僞既多、並稱人士百役不及。高臥私門、致公私闕乏、是事不舉。云云。

とある。沈約のこの上言は、梁初期のいわゆる天監の改革よりまえに行われたものである。宋の元嘉二十七年に七條を以て徵發したというのは、元嘉二十七年に庶を徵發した際、南兖州において六箇條の品官をあげ、父、祖、伯、叔、

兄、弟がその六箇條の品官のどれかに就いているか、あるいはかつて就いたことがあるかすれば徵發を免じ、それらに該当しない残りのものを徵發すべきを示し、かつそれを實行したのを指す^⑤。右の「雜役」は幹僮の役のことである。ここで注目すべきは「巧僞既多、並稱人士百役不及。高臥私門、致公私闕乏、是事不舉。」とある記事である。この際の人士は第六品官以上に就いた人を指す^⑥。そうした人士が「百役不及」である、とされているのは、當時第六品官以上にすべての役がかからないのを意味する。沈約が第九品官以上に就いたと僞った場合とそなかでとくに第六品官以上に就いたと僞った場合を區別し、後者の場合(始めて)すべての役がかからないといっていることは、當時第七・八・九品官が何らかの形で役の対象となっていたのを示唆しよう。

なお、宋書 卷八十二 沈懷文傳に、大明五年のこととして、上又壞諸郡士族、以充將吏。竝不服役。至悉逃亡。加以嚴制、不能禁。乃改用軍法、得便斬之。莫不奔竄山湖、聚爲盜賊。懷文又以爲言。

とある。魏書 卷九十七 島夷劉裕傳には、同一のことを、

是歳、凡諸郡士族婚宦點雜者、悉黜爲將吏。而人情驚怨、並不服役。逃竄山湖、聚爲寇盜。侍中沈懷文苦諫、不納。

と記している。大明五年は新戸籍制度が生じた孝建元年から七年目である。右はかつて士籍にあった士族のうち新政治體制から見ても士たる「資格」のないもの（つまり政治的身分が庶であるもの）を將吏役に徵發したが、そのために大きい困難が生じたのを示している。將吏役は恐らく幹僮Ⅱ雜役の一種であろうが、その推定の當否はとにかく、新戸籍制度ができてから七年もたつのに、かつての士族がたとえ淪落していても役の對象となるのを極めて不當としたということは、舊戸籍制度下にあつては士籍にあるものをもどのような形においても役の對象となしえなかったのを察せしめるであらう。そうすると、第七・八・九品官を（何らかの形で）役の對象とすることは、宋中期、孝建元年に新戸籍制度ができてから（かなりたつて）のことと考えられるのである。

第三節で述べるように、齊の永明二年第七・八・九品官を對象とする幹僮の役が生じたと考えられる。齊の永明二

年は宋の孝建元年から三十年目にあたる。ただし品官の幹僮の役は、實役に服するのを意味せず、卹を納めてそれに代えたものとしてよからう。さらにいうと、新戸籍制度下、もともと庶出身で第七品以下の勳位に就いて士となったもの及びそうした士であると偽るものの合計數に比べると、かつて士籍に附されていた下級士人の子孫で第七品以下の（清官たる）品官に就いて士となったものの數はとるに足りない。もともと庶で第七品以下の勳位に就いたものは、その殆んどが富裕であつた。そうした彼らにとって幹僮の役に卹を納める形で服するのは別に苦しいことではなかつたであらう。恐らくはこうした状態に引きずられて、かつて士籍に附されていた下級士人、その子孫で第七品官以下に就いたものが卹を納めることもいつしか普通のこととなつていったのであらう。

ちなみに、南史卷三十七沈慶之傳に、
給卹吏五十人。

とある。この卹吏は幹僮を指している。

三 國家財政の運営と卹

本節では、齊の武帝時代を中心に、國家財政の運営にか
らむ通貨問題という觀點から卹制を検討する。

宋齊時代、良貨^⑤古錢が不足していた實情については、
すでに屢々指摘されている。この不足は一應、國內の總額
の不足と民間での極端な不足とに分けて考えることができ
る。その間にあって卹は民間の良貨^⑤古錢を政府に吸いあ
げる機能をもっていたのである。ここで政府が民間の良貨
古錢を吸いあげた實情の一端を窺うと、南齊書卷三武
帝本紀永明四年五月の條に、

癸巳、詔、揚南徐二州、今年戶租、三分二取見布、一分
取錢。來歲以後、遠近諸州輸錢處、並減布直、匹准四
百、依舊折半、以爲永制。

とある。これは、南齊書卷四十竟陵文宣王子良傳に、これ
を概言して、「詔、折租布、二分取錢。」とあるのとあわせ
考え、永明四年には揚南徐二州の戶租は布に折し、その2
3を現實に布でとり、13を錢でとれ。永明五年以後は、
遠近の諸州のうち租として錢を輸するところは、舊來のよ
うにその租を布に折し、その折租布の12を現實に布でと
り12を錢でとるようにせよ。ただ折租布を錢で納めさせ

る際、その布の直を減じて一匹四百錢とせよ。この制は永
明五年以後永制とせよ。ということになる。^⑥かくて、當
時租も亦往々錢納させられていたのがわかる。その基準と
なる銅錢であるが、南齊書竟陵文宣王子良傳に、「詔、折
租布、二分取錢。」とあるのに續いて、

子良又啓曰、…又、泉鑄歲遠、類多剪鑿。江東大錢十不
在一。公家所受、必須輪郭。遂買本一千、加子七百。猶
求請無地、極革相續。尋完者爲用、既不兼兩。回復遷
貿、會非委積。徒令小民每嬰困苦。云云。

とある。これは錢納の際の銅錢が良貨^⑤古錢を基準とした
のを物語っている。ここで注目すべきは錢納させる際の布
の價額と現實の價額とに大きい差があったことである。す
なわち、南齊書卷二十六王敬則傳に、永明二年の竟陵王子
良の啓をのせている。そのなかに、

昔晉氏初遷、江左草創、絹布所直、十倍於今。賦調多
少、因時增減。永初中、官布一匹直錢一千。而民間所
輸、聽爲九百。漸及元嘉、物價轉賤。私貨則束直六千。
官受則匹准五百。所以每欲優民、必爲降落。今入官好
布、匹堪百餘。其四民所送、猶依舊制。昔爲刻上、今爲

刻下。氓庶空餒、豈不由之。救民拯弊、莫過減賦。云云。
とある。「束直六千」は布十四で六千錢ということである。ここに見える絹布の價額が良貨＝古錢を基準としての價額であるのはいうまでもない。この記事は（いままで論じてきた布が絹布であることを物語るだけでなく）錢納の際の布一匹の直が四百錢なり五百錢なりであることが過酷の「賦稅」を意味することを證している。こうした考察は、當時中央政府の良貨＝古錢吸いあげが盛に行われていたのを窺わせるに足る。

右に瞥見したような不當な吸いあげは當然民間の反抗をひきおこすことになる。いまその一端を永明四年正月に起った唐寓之の亂に見てみよう。南史卷七十七茹法亮傳に、（呂文度）又啓上、籍被却者、悉充遠戍。百姓嗟怨、或逃亡避咎。富陽人唐寓之因此聚黨爲亂。鼓行而東。乃於錢唐縣僭號、以新城成爲僞宮、以錢唐縣爲僞太子宮、置百官、皆備。三吳却籍者奔之、衆至三萬。竊稱吳國、僞年號興平。

とある。唐寓之の亂は通常檢籍が嚴格であつたため起つたとされているが、そこに錢納の苛酷さが大きく機能してい

たのはこれを見無視することができない。いまその様態を瞥見しよう。まず、南齊書卷二十二豫章文獻王傳に、

（永明）四年、唐寓之賊起。啓上曰、：齊有天下、歲月未久。澤沾萬民、其實未多。百姓恃險懷惡者衆。陛下曲垂流愛、每存優旨。但頃小大士庶。每以小利奉公、不顧所損者大。撻籍、檢工巧、督卹、簡小塘、藏丁匿口。凡諸條制、實長怨府。此目前交利、非天下大計。一室之中、尚不可精。宇宙之內、何可周視。公家何嘗不知民多欺巧。古今政、以不可細碎。故不爲此、實非乖理。但識理者、百不有一。陛下弟兄大臣、猶不皆能伏理。況復天下、悠悠萬品。怨積聚黨、兇迷相類、止於一處、何足不除。脫復多所、便成紘紘。久欲上啓。閑侍無因。謹陳愚管。伏願特留神思。上答曰、欺巧那可容。宋世混亂、以爲是不。蚊蟻何足爲憂。已爲義勇所破。官軍昨至。今都應散滅。吾政恨其不辦大耳。亦何時無亡命邪。

とある。「督卹」と「簡小塘」とは、兩者だけの關係においては兩者を別のものと考えられぬでもないが、「撻籍」と「檢工巧」とは一つのものとするのが隱當である。（そうすると「工巧」は戶籍の注のたくみなごまかしというこ

となる。) かくて、「督郵」と「簡小塘」とは「撻籍檢工巧」と對句をなすものとして、同一の事項を述べたものとすべきである。なお、「藏丁匿口」の上には、嚴重に(藏丁匿口を)取締った、といった旨の文字が脱落している(とすべきである。「撻籍檢工巧」と「藏丁匿口」を取締ること)とが直接的に檢籍を嚴格にすることを意味するのは明らかである。唐寓之の亂が起ったとき、豫章王疑が、(暗々裏に)それを生ぜしめた原因として、右のほかに「督郵簡小塘」をあげていることは、唐寓之の亂の背景として塘郵のあったのを察せしめるであらう。(右の豫章王疑の啓はその詔答から見ても、すべて唐寓之の亂に關したものとすべきである。) さて南齊書卷二十六王敬則傳に、會土邊帶湖海。民丁無土庶皆保塘役。(會稽太守王)敬則以、功力有餘。悉評歛爲錢、送臺庫、以爲便宜。上許之。竟陵王子良啓曰、…頃錢貴物賤、殆欲兼倍、凡在觸類、莫不如茲。稼穡難勦、斛直數倍。^(倍)今機杼勤苦、匹裁三百。所以然者、實亦有由。年常歲調、既有定期。僮郵所上、咸是見直。民間錢多翦鑿、鮮復完者。公家所受、必須員大。以兩代一、困於所質。鞭捶質繫、益致無聊。

臣昔忝會稽。粗閑物俗。塘丁所上、本不入官。良由陂湖宜雍、橋路須通、均夫訂直、民自爲用。若甲分毀壞、則年一脩改。若乙限堅完、則終歲無役。今郡通課此直、悉以還臺。租賦之外、更生一調。致令塘路崩蕪、湖源泄散。害民損政、實此爲劇。…愚謂、塘丁一條、宜還復舊、在所逋郵、優量原除。凡應受錢、不限大小、仍令在所、折市布帛。若民有雜物、是軍國所須者、聽隨價准直。不必一應送錢。於公不虧其用、在私實荷其渥。…上不納。

とある。この記事は、もともと民間で「自主的」に行っていた陂湖の修理を官自らが行うという名目にし、その修理に要すべき努力を錢納させ、しかも事實は修理をしなかったことを物語っている。この記事では塘丁がその役の代りに納めた錢を一應郵と區別している。さきの郵を督し小塘を簡かにしたというのは、塘丁がその役の代りに納めた錢を郵とし、その郵を取りたてるけれども塘の修理にその郵を用いないことを述べているのであるが、そうすると兩者は塘丁が役の代りに納めた錢と郵との關係について相反したことをいっていることになる。しかし、つぎのように考えればそれは自ら統一的に把握できる。王敬則が會稽太守

として塘役の代りに丁に錢を納めさせそれを官に入れたのは永明二年のことであるが、これを契機として舊來國家の役でなかった塘役が始めて國家の役たる幹僮の役としての性格を帯びることになった。この錢も亦卹とよばれた。

かくて永明二年以後塘役が新たに幹僮の役に加わり、しかもそれが現實に卹として錢納させられたこと、及びその結果として塘がこわれ人々が苦しんだと思われること、がわかる。ところで、のちに述べるように、唐寓之の亂にあたり唐寓之がその根據地とした錢塘縣は、縣民の生活上塘の修理が重大な意義をもっていた。新たに塘役の代りとして卹を錢納させられ、しかもその卹が塘役に還えられないで塘がこわれるとすれば、錢塘縣民は生活上の苦しみ、不安をもってきたに違いない。このように考えてくると永明四年唐寓之がその地を反亂の根據地としたのはむしろ當然のことであるといえよう。

蓋し、中央政府は卹として入った錢の幾分かを官人に卹として與え、殘りを他の用途にあてたのであろうが、以上瞥見したところから武帝の良貨吸いあげにおいて（塘役の代りに錢納させたものを含む）卹が極めて大きい役割を果

していたとされよう。

ここで品官と卹との關係を取りあげてみよう。前引の南齊書豫章文獻王傳の記事と南齊書王敬則傳の記事とから、舊來會稽郡において民丁が士庶の別なく「自主」的に塘役を保していたが、新たにその役を錢で評價して卹としたのが察せられる。その際、士も亦卹を課されたことが一應想定される。これと梁初第七・八・九品官に役が課されていること、つぎに述べるように、梁初寒微の士人層が少なくとも理論上幹僮の役を課されるべきであったと思われること、（舊戶籍制度下、政治的身分が士のものが役を課されていなかったこと、）をあわせ考えると、齊の永明二年、新戶籍制度下の戶籍偽濫による役人減少對策の一環として、第七・八・九品官が新たに幹僮の役の對象とされた、ただし、前引の沈約の上言においてはその役が舊來幹僮の役を意味した雜役のほかに新たに生じた役と理解されている、といえるのではなからうか。なお、品官に幹僮（的性格をもつ役）が課されるといっても、少なくとも現任官はそれに服することはできない。従つてその代りとして卹を納めることになるわけである。（以下、品官を對象とする

幹僮、卹を「幹僮」、「卹」という。）

さて、梁書 卷五十三 良吏・沈瑀傳に、振武將軍山陰縣令たる沈瑀に關し、

縣大姓虞氏、千餘家。請謁如市。前後令長、莫能絕。自瑀到、非訟所通、其有至者、悉立之階下、以法繩之。縣南又有豪族數百家。子弟縱橫、遞相庇蔭、厚自封植。百姓甚患之。瑀召其老者、爲石頭倉監、少者補縣僮。皆號泣道路。自是權右屏跡。

とある。沈瑀が振武將軍山陰令であつたのは梁初のこと、當時の政治體制は齊時代のそれとほぼ同様であつた。石頭倉監は司農に屬する品官で、振武將軍や山陰令のもとにあるものではない。右の「爲石頭倉監」は少者を縣僮に補したことに對比されるものであるから、監の下に僮を補つて讀むべきであらう。つまり、「瑀召其老者、爲石頭倉監、少者補縣僮。」は山陰令たる沈瑀が、その老者を（山陰令がその管下から送るべき責任をもたされていた）石頭倉監の「幹僮」とし、その少者を山陰縣の官衙の「幹僮」としたのを物語るとすべきであらう。右文では山陰縣に豪族數百家があつたことが示されている。こうした豪族はその

大部分が寒微の士人（つまり第七・八・九品官に就くべき士人）であつたに相違ない。（のちに引く世說新語に見える「縣諸豪姓」もこうしたものであらう。）右において、沈瑀が豪族の老者と少者とだけを「幹僮」とし壯者をそれから除いたことは、壯者が官途に就いていたのを物語るであらう。これは第七・八・九品官が「幹僮」の役の對象となつたにしても、現實には「卹」を納めてそれに出なかつたのを推測させる。また、右において（たとえそこに一種の懲罰的意味をもっていたにしても）、かつて第七・八・九品官に就いていたと思われる老者を石頭倉監の「幹僮」としたことは、第七・八・九品官を對象とする「幹僮」の役が塘役を幹僮の役に切りかえるところに始まつたにしても、やがてそれが、少なくとも理論上、一般的な幹僮の役にあてられるべきものとなつたのを證するであらう。

なお、唐寓之は錢塘縣をその本據としている。この錢塘縣は吳郡内の一縣である。いま世說新語 卷中之上 雅量第六の項の注を見ると、

錢唐縣記曰、縣近海。爲潮漂沒。縣諸豪姓、歛錢雇人、輦土爲塘。因以爲名也。

とある。ここでは豪族が中心となって、その地方の人々から銭を集めて人を雇い、以て塘をつくったことが示されている。これは會稽郡において塘を「自主的」に修理していたという際も、そこに豪族が主體となっていたのを示唆する。錢塘縣においても永明元年（あるいは同二年）まで豪族が中心となつて塘を「自主的」に修理していたが、以後それが否定され、かつ卹がとられたと考えるべきであらう。

附言すると、品官を對象とする「幹僮」、「卹」は、それが現實に「卹」として統一されているとすれば、現象的に役でないといえよう。そうした意味で、通典卷十八選舉六雜議論下の項に、

（唐）禮部員外郎沈既濟論曰、…故漢王良以大司徒位、免歸蘭陵。後光武巡幸、始復其子孫邑中徭役。丞相之子、不得蠲戶課。而近代以來九品之家皆不征。云云。

とあるのと少しも矛盾しない。しかし、それが雜役の延長として生じた役であり、「卹」はその第二義的なものであるといえぬこともない。沈約の上言はそうした立場にあるものである。要するに何れの見方をとつてもそれが反對の

見方を否定するものではないのである。

ちなみに、スタイン將來漢文書第六一三號を見ると、北魏の大統十三年（西紀五四七年）、蘆寇將軍劉文成が雜任役（本稿でいう幹僮の役）の對象とされ、しかも現實には服役の代りの税租を納めさせられているのがわかる。蘆寇將軍は品官である。（魏書卷百十三官氏志九には從第七品の上階として記されている。）この際劉文成がかって蘆寇將軍であつたというのかそれとも現に蘆寇將軍であるというのかわからない。品官就任者は退官後もその就いた品官の官品に應じた政治的身分、待遇を與えられるから、前者であつたにしても、それは當時品官が雜任役の對象となり、かつ現實には物を納めてそれを免れたことを物語るとされよう。後者であつた際それと同様のことがいえるのはいうまでもない。ここで注目すべきはそうした劉文成が課丁男（役を負担すべき丁男）に含まれていることである。こうした實情は、巨視的理解において永明二年（西紀四八五年）以後の南朝の様態と同様であるとされよう。^①

論を進めると、唐寓之の亂はやがて平定されたが、武帝は以後舊來の政策の推進をさきほどの強引さをもってしな

かったようである。戸籍偽濫の改訂についていえば、南齊書卷三十四虞玩之傳に、

至世祖永明八年、謫巧者、戍緣淮各十年。百姓怨望。世祖乃詔曰、夫簡貴賤、辯尊卑者、莫不取信於黃籍。豈有假器濫榮、竊服非分。故所以澄革虛妄、式允舊章。然塵起前代、過非近失。既往之愆、不足追咎。自宋昇明以前、皆聽復注。其有謫役邊疆、各許還本。此後有犯、嚴加翦治。

とある。前引の南史茹法亮傳の記事に明らかなように、戸籍偽濫がみつかつて却籍されたものは、唐寓之の亂以前にも遠戍にあてられているのである。恐らく亂後しばらくそのことがなかったが、永明八年に再びそれを實施するようになったのであろう。百姓がそれを怨望したため武帝が改めて右の詔を出したわけであるが、その詔ではいままでの戸籍偽濫により遠戍されているもの（及び遠戍すべきもの）を許すばかりか、宋の昇明以前はたとえ偽濫であるのがわかっていてもそれをそのまま認めることを明示している。

（宋は昇明三年までで滅亡する。）そこでは齊の建元元年（建元は昇明のつぎの年號）以來の戸籍偽濫を改訂する意

を含ませていたと受け取れる。しかし大きい退歩としてみるべきこの詔が出た以上その實效を期待することは始めから望むべくもなかったのである。以上瞥見したような政策の「修正」が良貨^⑧古錢の吸いあげにどのように現われたかということであるが、それは少なくとも四つの方面に現われる。その第一は、折租布一匹あたりの錢額の減少である。（揚南徐二州の州民は、各戸の租を布に折しその布の半ばを一匹五百錢の割で錢納していたが、永明四年にはそうした際布を $\frac{2}{3}$ 、錢を $\frac{1}{3}$ の割合とした）。また、永明五年以後にあつては、（揚南徐二州を含む）「輸錢處」たる諸州において州民が租を布に折しその折租布の半ばを錢納する際布一匹四百錢の割が永制とされた。この實情はさきにふれた通りである。その第二は、政府の手もちの錢を民間へ流したことである。それについては、南齊書卷三武帝本紀永明五年九月の條に、

丙午、詔曰、……京師及四方、出錢億萬、糴米穀絲綿之屬。其和價、以優黔首。云云。

とあり、通典卷十二食貨十二輕重の項に、

齊武帝永明中、天下米穀布帛賤。上欲立常平倉、市積爲

儲。六年、詔、出上庫錢五千萬、於京師、市米買絲綿紋絹布。揚州出錢千九百一十萬。揚州理建業。今江寧郡也。南徐州二百萬。南徐州理京口。今丹陽郡。各於郡所、市繒。南荊河州二百萬。南荊河州理壽春。今郡。市絲綿紋絹布米大麥。江州五百萬。江州理臨陽。今郡。市米胡麻。荊州五百萬。荊州理南郡。今江陵。郢州三百萬。郢州理江夏。今郡。皆市絹綿布米大小豆大麥胡麻。湘州二百萬。湘州理長沙。今郡。市米布蠟。司州二百五十萬。司州理汝南。今義陽郡。西荊河州二百五十萬。西荊河州理歷陽。今郡。南兖州二百五十萬。南兖州理廣陵。今郡。雍州五百萬。雍州理襄陽。今郡。市絹綿布米。使臺傳並於所在市易。

とある。南齊書の出錢の記事と通典のそれとは一年のズレがあるが、それはこの際別に重要ではない。必要なのは唐寓之の亂後、たとえ一度であっても高額の銅錢が政府から民間に放出されたことである。その第三は、永明八年の銅鑄の採掘及び鑄錢である。南齊書卷三十七劉俊傳を見ると、永明八年、劉俊が武帝に啓して蜀の南廣郡で銅山を採掘することをすすめた記事をのせ、續いて、

上從之。遣使入蜀、鑄錢。得千餘萬。功費多、乃止。

とある。この採掘、鑄錢はさきの銅錢放出と關連づけて考へるべきであろう。かくて、唐寓之の亂後、皇帝、中央政府は民間の銅錢を吸いあげるだけでなく、部分的にはそこへの還元をもちかけたのが察せられる。その第四は唐寓之の亂後（雜役としての塘役は残ったであろうが）、塘役を卹の對象とするのが廢止されたことである。南齊書卷七東昏侯本紀永元三年の條を見ると、廢帝東昏侯の惡政ぶりを述べ、そのなかに、

揚南徐二州橋桁埭丁、計功爲直、斂取見錢、供太樂主衣雜費。由是、所在塘瀆多有隳廢。

とある。これはその證明となろう。（以後、管見の及ぶ限りでは、塘役が卹の對象とされたことはない。）

ここで魏書卷九十八島夷蕭道成傳を見ると、廢帝鬱林王について、

初、蕭頤（武帝のこと）聚錢上庫至五億萬。齋庫亦出三億萬。金銀布帛絲綿不可稱計。至此歲末、所用過半。皆賜與左右厮卒之徒。及至廢黜、府庫空盡。

とある。この記事は、武帝のときたとえ部分的な民間への放出があつたにしても、國庫への良貨吸收策が、決して放

棄されたのではないのを示唆する。

註

- ① 唐長孺氏が「魏晉戸調制及其演變」（魏晉南北朝史論叢）で簡單に邸にふれておられる。
- ② 雜役の語については稿を新たにして論ずる。
- ③ 拙稿、「南朝の戸籍問題」（史學雜誌第六十九編第八號）参照。
- ④ 宮崎市定氏、「唐代賦役制度新稿」（東洋史研究第十四卷第四號）・濱口重國氏、「唐に於ける兩稅法以前の徭役勞働（上・下）」（東洋學報第二十卷第四號及び第二十一卷第一號）・西村元佑氏、「唐律令における雜任役と所謂色役資課に關する一考察」（龍谷史壇第五十號）・拙著、「魏晉南朝の政治と社會」参照。
- ⑤ 邸の類は不明であるが、それが一般に大きい負擔となつたのは、本文で述べるところに明らかであろう。なお、幹僮なり邸なりの對象となる役人の年令も不明である。
- ⑥ 拙稿、「宋中期の新戸籍制度の出現をめぐって」（東洋史學第二十五輯）参照。
- ⑦ 前掲、「南朝の戸籍問題」参照。
- ⑧ 宮崎市定、「九品官人法の研究」・拙稿、「晉南朝の士大夫」（歴史學研究第二三八號）参照。
- ⑨ 前掲、「魏晉南朝の政治と社會」参照。
- ⑩ 前掲、「魏晉南朝の政治と社會」参照。
- ⑪ 前掲、「宋中期の新戸籍制度の出現をめぐって」参照。
- ⑫ 前掲、「南朝の戸籍問題」参照。
- ⑬ 例えば、何茲全氏、「東晉南朝の錢幣使用與錢幣問題」（歴史語言研究所集刊第十四本）・川勝義雄氏、「侯景の亂と南朝の貨幣經濟」（東方學報第三十二冊）参照。
- ⑭ 拙稿、「南朝の租、調」（史淵第八十輯）参照。
- ⑮ この「匹」は麻布一匹のことであろう。
- ⑯ 前掲、「魏晉南朝の政治と社會」参照。
- ⑰ この文書を大統十三年と決定したことについては、山本達郎氏、「敦煌發見計帳樣文書殘簡（上・下）」（東洋學報第三十七卷第二號、第三號）参照。なお、本文書についての私見は別稿、「南北朝時代の幹僮、雜役、雜使、雜任などについて」（史淵第九十一輯）で述べる。舊來の諸研究については同稿参照。
- ⑱ 前掲、「南朝の戸籍問題」参照。